
ふざけた称号

パシ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふざけた称号

【Nコード】

N9214E

【作者名】

パシ子

【あらすじ】

原作47巻後の話。平次の『子分』宣言が腹立つあまりに書いたへボ文。和葉と和葉の親友の昼休み。親友語り。オリジナル親友で、平次に厳しいので注意。

「子分ん!？」

「こ、声大きいて…!!」

両手をあたふたさせて冷や汗を流す和葉に、私はハツとして慌てて自分の口を塞ぎ周りを確かめる。

良かった、奴はまだ売店から戻ってきてはいない。安堵に胸をなでおろし和葉に謝罪すると、和葉は首を横に降り苦笑を溢した。

「私も思わずあの時怒鳴ってしまったし」

「でも小学生やあるまいし…子分て…」

「まあ、平次やしな」

呆れて机に肘をつく私に、先程買ってきた紙パックにストローをさしながら、和葉がため息を溢す。前に私が美味しいと勧めた苺ミルク。この頃和葉よく買つとるな。最近のお気に入りにはランクアップしとるみたいだ。なんだか場違いに嬉しい。

「なんやな、平次曰く、アタシが他の男人人と話しよったら腹立つんやと。」

「……………は？」

「そんで何でかずっと考えとって、ようやく自分がアタシのこと子分て思うてて、自分の面子がたたんから腹立つて分かったんやそうや。」

啞然と口を半開きにして固まってしまった私の前で、和葉がストロ―を吸う。口調こそ淡々としているが、眼は完全に据わっていた。

…………いや。無理ないわな、そりゃ。私の立場でも絶対そうなると思

う。というか、それより酷いやもしれん。血の気多いから。短気やから。自分で言うのも悲しいけど。

しかし、…なんじゃそりゃ。他の男に腹立つのは面子があるから、て。何処をどう考えたらそんな結論に達するんだ、一体。意味わからん。どんな脳の構造しとるんじゃ、奴は。

不意に脳裏を霞める、今はいない、黒い肌の鈍感推理馬鹿男。

目の前の可愛い親友は、表面上ただ怒っているように見え、けれどやはり何処となく落ち込んでいるのが分かる。

それくらい、お見通しだ。そんな姿と奴をダブらせると呆れとともに今度は沸々と、腹底から怒りが沸いてくるのを感じた。思わず、拳を握りたい衝動にかられる。どころか、いますぐにでも服部を捕まえて一発食らわせてやりたいくらいだ。は？何？和葉は自分より下ってか？なんですかあんな何様ですか。

和葉の気持ち、聞くだけじゃない、私はずっと横で見てきた。中学の頃九州のド田舎から転校して和葉と仲良うなってから、ずっといつも服部のこと気にかけて、あいつとお揃いのお守りを肌身離さず大事にして、あいつが姿を消せば一生懸命探し回って、あいつが事件で暫く帰らなかつたり怪我したりすれば自分のことのように、下手したらそれ以上に心配して。

そんな和葉をずっと見てきた私だから尚更一層、服部の（私からすれば）理解不能にも程がある『子分』論理が納得いかない。はあ？みたいな。怒りで頭が沸騰して、ヤカンよろしく蒸気が吹き出そう。だ。あんまりじゃないか。

確かに、服部は和葉の思いを知らない上に中身があれだから仕方ないかもしれないけど。おまけに超鈍感まで加わって、どうしようもないかもしれないけど。

こんなにもあいつを気遣い思い続け散々振り回された拳句、与えられた称号が『幼なじみ』でも『クラスメイト』でも、まして『好きな奴』でもなく、『子分』ときた。『お前は俺のことを賞賛するの

は当たり前』ときた。本気で舐めてんのか、みたいな。

だけど、此処で私が怒るのも御門違いて気持ちも、ちゃんと、ある。大丈夫、そこら辺はギリギリわきまえてます。本当、ギリにだけど。本音は直ぐにでも服部に怒鳴りこみにいきたくて堪らないんだけど。あくまで私は部外者。仮に私が

「そんなん腹立つ」て怒鳴って服部に向かったって、何の意味もない。むしろ勝手だし、失礼だ。本当に怒る権利があるのは、和葉なんだから。

ここは成長して我慢せねばと、渦まく葛藤を必死に力の限り抑えつける。耐えろ、私。耐えろ。

それでも余す力を拳に変えようとする自身に苦闘していると、不意に「まあ、な…」と和葉がポツリと呟いた。

「正直、しゃあないんかなあ…とも思うんよ」

「え」

「だって、あれやもん。アタシが一方的に想って、期待したりついていたりしよるだけやし。そりゃ子分扱いは腹立つけどな。それでアタシが落ち込んだりするんは、平次のせいじゃないよ」

和葉は、私の服部に対する怒りを悟ったんだろう。和葉の言葉は、本人自身へ言いきかせているようで、私に言い聞かせているようでもあった。多分、両方。

無理して微笑む和葉に、胸が軋む。ああもう、なんでそこまで。

私は、和葉が好きだ。

元気で明るくて、だけどすぐ怒ったり泣いたり、表情がコロコロ変わって、意地っ張りで、無鉄砲で、負けず嫌いで、それで…めっちやめちゃどうしようもなく優しい子で。大好きだ、一番。

だから、そんな顔させたくないのに。一生懸命な分、報われて欲し

いのに。アホ畜生。

「…和葉は、どうしようもないくらい良い子なのに」
「わわっ」

思わず、抱きしめる。

和葉は戸惑いに声を上げた。

「ちよ、どないしてん？」

「…本当服部が恨めしいわ…私が男やったらあんなボケ男放っておいて和葉連れさるんに」

「……それ、同じようなことどっかで言った気がするわ」
「そうなん？」

そりゃ気が合いますなー、なんて抱きついたらままほざいてみたら、なんやそれ、て笑われた。……あ、やっと自然に笑ったな。やっぱり笑顔が一番やな。

その時ふと、視線を感じた。

自然、そちらへ顔を向ける。途端、黒い肌の男と眼が合った。いつの間にか教室に戻ってきていたらしい。服部、平次。

和葉は、気づいてないみたいだけど。服部は至極複雑そうな面持ちで此方を見つめていた。なんじゃい、他人の子分に抱きつくുന്നത്か。ざけんなアホ。

今のあんたなんか、和葉は渡すものか。

よっしゃ、此処は一発和葉ン家の親父さんにも共同戦線といってもらおう。これくらいは、許されんですよ。

頭に描いた計画にニヤリと笑むと、服部が今度は至極気味悪そうに顔を歪め退けぞった。昼休み終了のチャイムが、鳴った。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9214e/>

ふざけた称号

2010年10月11日21時27分発行